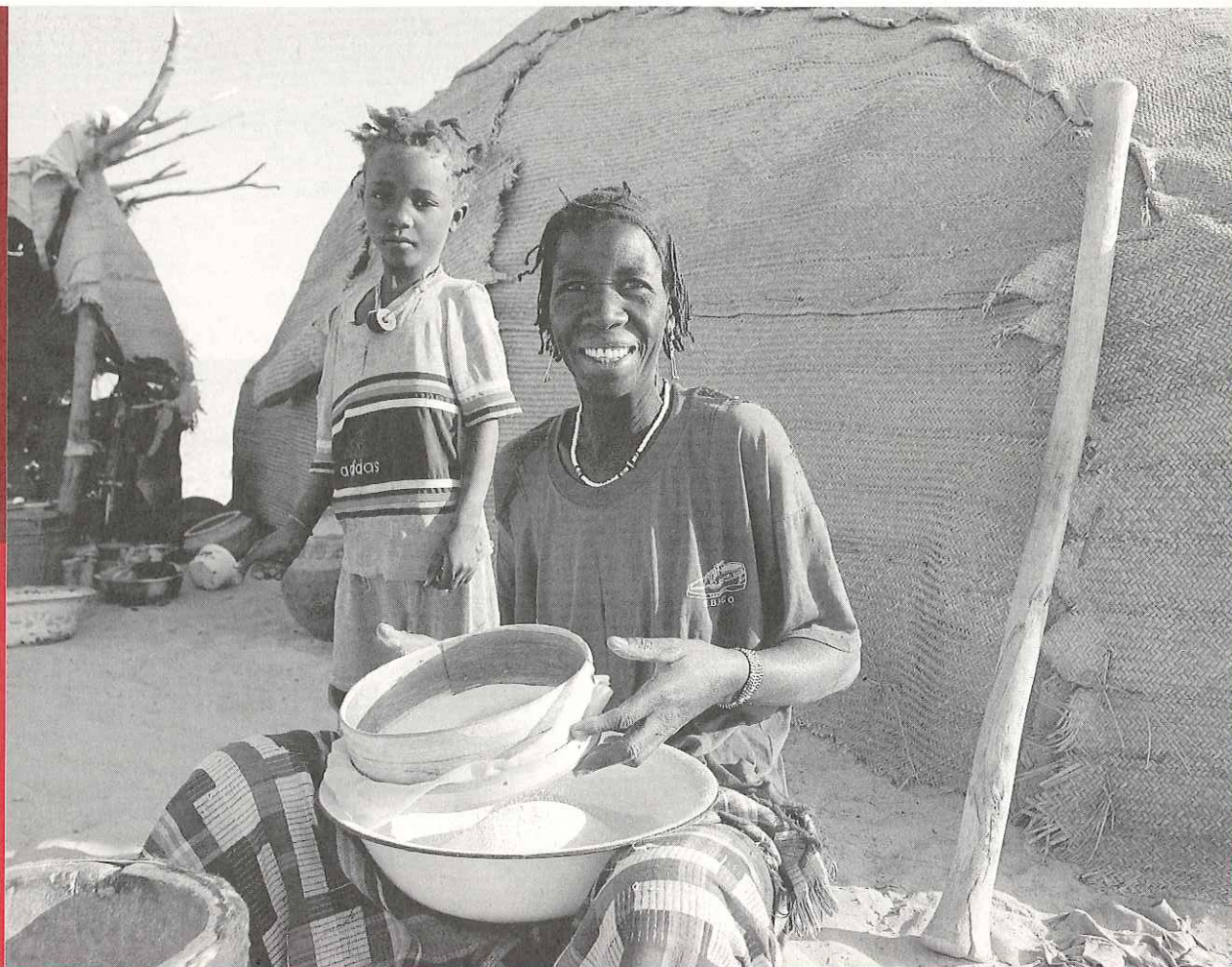


CARE World

Vol. **2** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
March 2006

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。



Contents



- page 3 **スリランカ通信**
ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
TEAプロジェクト プロジェクトマネージャー 栗原俊輔
- page 4 **スペシャルレポート スマトラ沖津波1周年企画 チャリティ写真展**
「スマトラ沖津波から1年 -生きるチカラ、復興への鍵-」 報告
ケア・インターナショナル ジャパン
マーケティング部ファンドレージング担当 高木 美代子
- page 8 **フィールド最前線 スマトラ沖津波復興支援事業**
・スリランカ「学校における子どもの心のケアプロジェクト」 報告
ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 草川 町子
・インドネシア「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」 報告
ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 鈴木 幸子
- page 10 **スリランカ人スタッフ 日本活動レポート**
- page 12 **私スタイルのCAREライフ**
ケア・インターナショナル ジャパン デザインボランティア 佐藤 よし子
- page 13 **Our Supporters** ~会員、寄付金協力者紹介
- page 16 **CARE Notice Board**

表紙写真：アフリカのマリ共和国、Bella村にて。
©2004 CARE/Lori Waselchuck

スリランカ通信

ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
TEAプロジェクト* プロジェクトマネージャー 栗原 俊輔

*TEAプロジェクトについては本誌10ページに概要
が掲載されています。

2006年1月23日(月)

☀ 快晴

今日は久しぶりの快晴。外は上着なしに歩けるくらいだ。ヌワラエリヤはスリランカという南国に位置しながら年間平均気温が12度前後と非常に低い。これはヌワラエリヤが標高2,100メートルという高地に位置しているからである。2000メートル超というのは富士山の5合目くらいである。日本ではそんな高地には誰も住んでいない。スリランカが赤道近い南国なので、この標高でこの気温なのだろう。

スリランカの中でも珍しい気候および地勢のヌワラエリヤ。当然スリランカ人のあいだでも避暑地として人気である。この街はイギリス植民地時代に開拓された。それまではほとんど誰も住んでいなかった。今でも街の建物などはイギリス時代のもので多く、リトル・イングランドという別名もあるくらいだ。気候も当然その名前の由来に一役買っている。

スリランカは北海道より一回り小さく、九州より少々大きいという大きさの島である。これほど小さな南洋の島に、ヌワラエリヤのような年中涼しい場所があることはスリランカ人の誇りでもある。この街を訪問するには4月が一番過ごしやすい季節である。この時期はシンハラ・タミル正月でもあり、スリランカは連休になる。そしてコロomboやキャンディをはじめとしてスリランカ各地からヌワラエリヤを目指して多くの観光客がやって来る。4月のヌワラエリヤは花の季節でもあるが、ヌワラエリヤがスリランカのほかの場所と違うのは花の種類も然りで、街の中心部に位置するピクトリア・パークはバラが満開になる。椰子の木などは街中どこを見渡しても見つからない。そんな植生の違いも脱日常へと導いてくれる。

このヌワラエリヤの特殊な気候と地勢



美しい紅茶農園の景色。しかし居住者たちの生活は実に厳しい(著者、写真左)



誕生日にスタッフからプレゼント。紅茶農園での日常業務を忘れ、ほっとできるひととき



CAREの実施するTEAプロジェクトにおいて、農園居住者の社会サービスへのアクセス改善に向けた取り組みの1つとして、インフォメーション・センターを開設。写真は、その開所式での一コマ

を一番に生かしたものがお茶である。この微妙な気候と(日本でも年間平均気温が12度などという街は存在しない)年間を通じて適度に保たれている湿度と霧がお茶の生育、香り付けに最適だという。スリランカのどの街からヌワラエリヤに来るにしても、最後の2時間はひたすらお茶畑の中。天気の良い日などは一面が緑のじゅうたんのよう美しく映える。道行くお茶摘みの女性たちも、外国人、スリランカ人を問わず旅の気分を高揚させてくれる。

スリランカといえばセイロン・ティーが有名である。なかにはいまだにスリランカというよりはセイロンと言ったほうが通じやすい場合もあるくらい、セイロン=お茶という印象が世界中の人々に浸透している。これはヌワラエリヤをはじめとする、スリランカの高原地帯の気候がいかに紅茶生育に合っており、また質の高いお茶を生産し、人々に愛飲されているかを証明するものである。そしてお茶摘みの女性を眺めながら、ヌワラエリヤにたどり着くまでの道のりで、本

場セイロン・ティーへの期待が膨らむ。しかし、私たちはあまりにも知らなさすぎる。この広大な緑のじゅうたんの影に隠れたさまざまな問題があることに。いつも笑顔を絶やさずお茶摘みをしている女性たち。彼女らは、摘んだお茶がどこで、誰に飲まれているか知っているのだろうか？彼女らは、自分たちが摘んだお茶が自分たちの日給以上の付加価値を生み、莫大な利益をスリランカはもとよりイギリスその他の紅茶業界に生み出していることを知っているのだろうか？そして、彼女たちは自分たちがなぜほかのスリランカ人から差別されているのか、なぜ生まれてから疑問もなくお茶摘みの労働者として従事しているか、知っているのだろうか？

こんな快晴のすがすがしいヌワラエリヤは、この街に住むタミル系お茶畑住民の抱えるさまざまな問題も一瞬忘れさせてくれる。が、私たちはここヌワラエリヤから問題を外へ向けて発信していかなければいけない、と小春日和の午後に思うのであった。

特集 Special Report

スマトラ沖津波1周年企画 チャリティ写真展 「スマトラ沖津波から1年 —生きるチカラ、復興への鍵—」報告

ケア・インターナショナル ジャパン マーケティング部ファンドレージング担当 高木 美代子



銀座のマロニエ通りから少し道を入ったところに位置するギャラリー青羅

ケア・インターナショナル ジャパンは、スマトラ沖地震・津波の発生から丸1年を迎える節目にあたり、2005年12月25日から29日の5日間にわたり、ギャラリー青羅（東京都中央区銀座3-10-19 美術会館1F）にて、チャリティ写真展「スマトラ沖津波から1年—生きるチカラ、復興への鍵—」を開催しました。

津波発生を機に広がる CARE支援者・協力者の輪

写真展の開催は、多くの皆さまのご理解とご協力がなければ成しえなかったものです。写真展の趣旨にご賛同いただき、大変貴重な写真を快くご提供くださいましたハーシャダシルバ氏、また無償でギャラリーを提供して下さった

美術会館様をはじめ、後援や協賛、また広報面などで協力いただいたスポンサーの皆さまなど、開催にあたっては本当に多くの皆さまにご支援いただきました。

また開催中は晴天に恵まれ、年の瀬の多忙な時期にもかかわらず、延べ182名の皆さまにご来場いただくとともに、学生や社会人など、20名を超えるボランティアの皆さまにもご協力いただきました。この場をお借りして、心より感謝、お礼申し上げます。

ハーシャダシルバ氏による 写真37枚を展示

写真展では、スリランカで自身が津波に遭遇した写真家ハーシャダシルバ氏がとらえた津波発生直後の被災状況に加え、当財団が現地CAREと協力して実施する2つのスマトラ沖津波復興支援事業（「国内避難民のための水と衛生プロジェクト（インドネシア）」と「学校における子どもの心のケアプロジェクト（スリランカ）」）*の現場において、復興に懸命に取り組む人々の姿や子どもたちの笑顔など、計37枚にも及ぶ写真を一挙公開しました。

そこには決して無力感や悲壮感漂う人々の姿ではなく、自然の猛威に全力で立ち向かい、自らの力で生活を立て直そうとするまさに「生きるチカラ」に満ち溢れた姿が、1枚1枚の写真として切り取られており、多くの方に共感いただ



25日のクリスマスパーティーにて。来場者の方々には、スリランカのお菓子などを食べながら、なごやかに話をして情報交換したり、交流を深めていただきました

きました。

*スマトラ沖津波復興支援事業については、本誌8、9ページの「フィールド最前線」をご覧ください。

「生きるチカラ」を支える CAREの事業報告

ギャラリーでは、被災現場の状況報告とともにスマトラ沖津波復興支援事業の事業報告会も行いました。12月25日は「あの時、そして今—始まったばかりの復興」と題して事務局長が講演。一般の参加者に加え、NHKやフジテレビからの取材を受けるなど、マスコミからも反響をいただきました。

27日と28日の両日には、事業担当者がインドネシア、スリランカそれぞれの現場や事業実施風景の写真を紹介しながら、事業の概要をはじめ、成果や課題、また今後の展望について報告しました。また、25日のクリスマスパーティーでは、それぞれの国の歴史や文化、そして政治的背景などを三択のクイズ形式でひも解きながら、現地の課題やCAREの事業理解に欠かせない基本的な事柄について、楽しみながら理解を深めていただきました。

多くの方々と共に迎えた 津波1周年の日

ちょうど津波から丸1年の日である26日には、チャリティワインパーティーを開催し、会員の皆さまをはじめ、日頃よりご支援いただいております支援グループや企業担当者など、70名を超える方々にお越しいただきました。ギャラリーは、津波1周年を記念して、スリランカで作られた特別なキャンドルがともされ、昼間の雰囲気とは一転、とても幻想的で温かいムードに包まれました。

当財団の和久本会長による挨拶と黙とうで厳粛に始まり、その後、駐日インドネシア大使 アブドゥル イルサン氏と



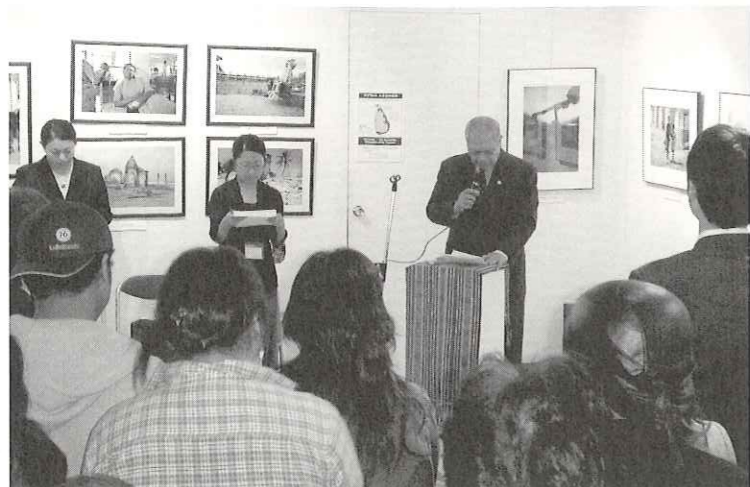
クリスマスパーティーにて。クイズを通して、津波復興支援事業を実施しているスリランカとインドネシアの事業内容や文化を紹介



事業担当スタッフからスリランカについてのクイズ。皆さん、真剣に考えながら楽しんでくださったようです



27日のインドネシアにおける復興支援事業報告会にて、報告を行う事業担当スタッフ



26日のチャリティワインパーティーにてスピーチをされる駐日インドネシア大使のアブドゥル イルサン氏



チャリティワインパーティーにて。会員の方など多くの方々にご来場いただきました



ワインパーティーは、ピアニストの鳴海周平さんのご協力によりとても素敵な雰囲気に

ケア フレンズ・東京 安倍洋子会長によるスピーチをいただきました。およそ2時間の間、当時の被災状況や現地の活動に思いをはせながら、写真をご覧いただいたり、ピアノ演奏を聴きながらワインやスリランカのお菓子を楽しまれたり、会場は参加者の熱気で包まれました。

チャリティ・オークション参加を通しての事業支援

写真家ハーシャ ダシルバ氏のご協力を得て、チャリティワインパーティーの後半には、当財団としては初めての試みであるチャリティ・オークションも開催しました。(株)イースクエア代表取締役会長木内 孝氏の進行のもと、事務局長が現地の状況やストーリーなどを織り交ぜながら1枚1枚丁寧に写真を紹介し、その結果、予想を上回る15枚の写真を落札いただきました。

また、写真オークションに加え、写真展開催中、当財団関口理事長提供によるワインとシャンパンのサイレント・オークションも開催しました。皆さまのご参加に心より感謝いたします。

ご寄付349,257円を「スマトラ沖津波復興支援事業」に活用

写真展開催中、受付やギャラリー内に募金箱を設置し、寄付のご協力をお願いしました。

またCAREロゴが入ったトレーナーやマグカップなどオリジナルグッズをはじめ、株式会社 生活の木様、スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社様など協賛企業からの提供商品、インドネシアおよびスリランカの民芸品、またボランティアの皆さんお手製のケーキ等の物品販売を行いました。中でも、急ぎよ、写真展のためにスリランカから取り寄せたクリスマス限定のミニケーキは、その真っ赤な包装とお手ごろな価格で、大

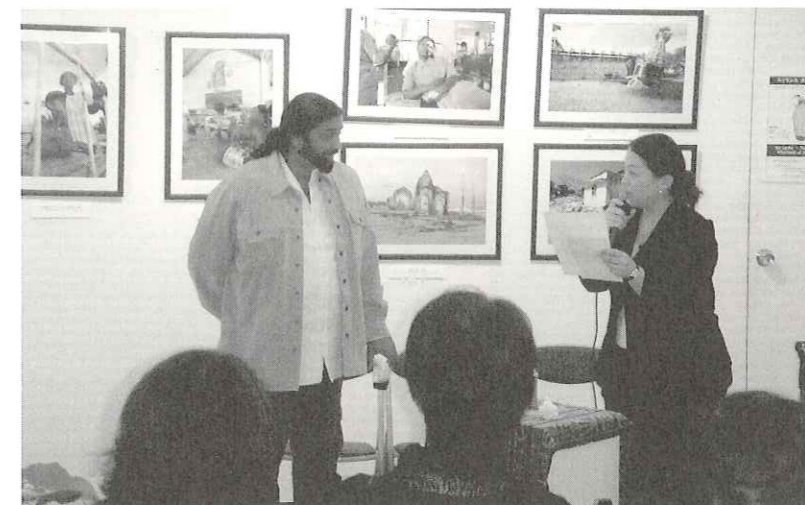
変人気をいただきました。

オークションへのご参加に加え、募金箱への寄付や物品の購入を通していただきましたご寄付は、スマトラ沖津波復興支援事業を通して有効に活用させていただきます。

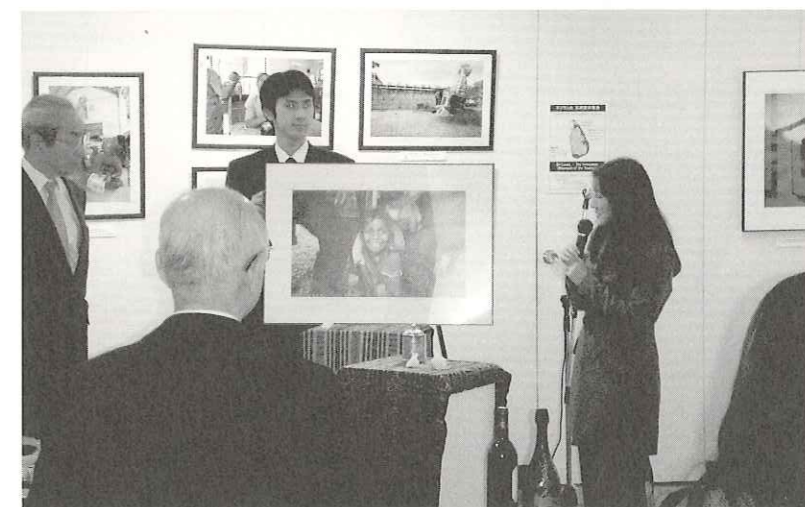
おわりに

津波発生直後に比べ、日本では関連ニュースがほとんど取り上げられていなかった中、記帳用のノートに残されていたメッセージがとても印象的でした。

「このような援助や途上国の問題は、知ろうとしなければ、知らずに終わってしまいます。(中略)世界の人々は共生しているので、途上国の問題は私たちにとって深く関わることだと思います。(都内大学生)」



写真家ハーシャ ダシルバ氏 (写真、左)。今回のチャリティ写真展のために合計37枚の写真を提供



チャリティワインパーティーでの展示写真のオークションの様子。当財団事務局長 (写真、右) が現地の状況などの解説を交えながら各写真を紹介

中長期的なご支援のお願い

アジアの周辺国だけではなく、はるかアフリカまでを巻き込み、23万人以上の命を奪うとともに、150万人を避難民と化し、その何倍もの人々の生活を一瞬にして破壊したスマトラ沖地震そして津波。その復興には、3~5年、もしくは10年かかるといわれています。

CAREでは、人々の「生きるチカラ」が復興への鍵であり、それを支えていくことが使命だと信じ、今後も引き続き、被災したコミュニティの人々と話し合いを重ねながら、長期的な視野で質の高い支援活動を継続していきます。

引き続き、金額の多少に関わらず、多くの皆さまからの温かいご支援をお待ちしています。

◆郵便振込み (振り込み手数料免除)

口座番号：00130-6-685603

口座名義：財団法人ケア・インターナショナル ジャパン 募金口

*通信欄に「スマトラ」とご記入ください。



フィールド 最前線

スマトラ沖津波 復興支援事業

スリランカ「学校における子どもの心のケアプロジェクト」報告 ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 草川 町子

ハンバントタはスリランカ南部州に属し、国土の南海岸のほとんどを占めています。そのため、津波の際には子どもを含め、大きな人的被害を受けました。海辺には今なお、椰子の木の合間に家の残骸が残り、被害の大きさと復興の難しさを感じさせます。現地ではCAREをはじめ、多くのNGOが住宅などの建設を行っていますが、家族の死や、転居や失業のために人々が被っているストレスははかりしれません。日々の生活に追われる余り、子どもの教育が二の次三の次になることも多く、子どもの成績や就学率の低下が見られます。子どもたち自身も、身内や友だちの喪失や、急激な生活環境の変化により心にトラウマを抱えるケースが報告されています。

津波から3か月後、2005年4月に立ち上げた「子どもの心のケアプロジェクト」では、この地域の4つの学校を中心に、子どもたちの心の傷が癒され心身ともに健全な生活を送ることができるよう、活動を行っています。子どもたちがつらい体験を乗り越えていくプロセスには、子どもたちの保護にあたる人々（親、教師、学校関係者等）が適切な知識とスキルをもって彼らに向き合うことが不可欠です。

地域の人々がコミュニティとしてこの課題に取り組んでいくために、この

プロジェクトはあえてトラウマ・カウンセリングという方法は取らず、まず各学校コミュニティの人々による「学校支援グループ」を組織し、啓発と研修のためのワークショップを実施することから始めました。研修の内容は津波のメカニズムの説明に始まり、トラウマに関する知識、それを乗り越える方法など。その上で、各コミュニティで取り組む参加型アクションプランの立て方を学んでもらいました。これはそれぞれの学校コミュニティのニーズに合った活動を、彼ら自身の手によって実現していくための計画書です。ワークショップで各学校支援グループが立てた計画には、水道設備や図書館などの学校設備の整備、音楽やスポーツなどのレクリエーション活動、進学セミナーなどの学習活動のサポートなどアイデアを凝らしたさまざまな活動が挙げられていました。

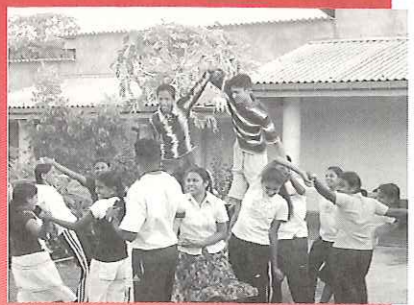
これらの活動は現在、それぞれのコミュニティで順次行われています。例えば、ある学校では校庭を整備して遊具を設置しました。学校の教師によると、これにより子どもたちはグループで遊ぶ機会ができ、ストレスの発散に役立っているとのこと。ケア・インターナショナル ジャパンでは2008年の3月までこのプロジェクトを継続していきます。

〈ヴェヌーシのストーリー〉

デヴァナンダ・マハ・ヴィディヤラヤ学校では144名の生徒が直接的、間接的に津波の被害を受け、また学校も教室や校舎の壁などの一部が損壊しました。この学校の学級委員のひとりであるヴェヌーシ（17歳）は、学校支援グループのメンバーとなり、CAREによるワークショップを経て今では積極的にアクションプランの計画と実施に携わっています。

ヴェヌーシは、彼女を含め間接的に津波の被害に遭っている生徒にとって、自分たちの手でアクションプランを進めていくプロセスそのものが心を癒してくれると言います。彼女の発案で、各学級委員たちが学校の活動により前向きに関わっていくことができるよう、研修の機会も企画されました。ヴェヌーシは、他のクラスメイトが苦難を乗り越えて勉強に集中できるよう、リーダーである自分たちがスキルを身につけ、手助けできるようになりたいと思っています。このスキルは、早ばつなど津波以外の災害時にも役立つものです。

「The skills I'm learning will help me later in life- developing a positive attitude and facing challenges, and developing my confidence to face challenges without fear so that I can accept that a failure is a stepping stone to future success. (CAREのワークショップで学んだことは今後の人生に役立つものです。私は失敗を将来への足がかりとして受け入れられるようになりました。前向きな態度を養うこと、自信を持って恐れずに困難に立ち向かうことを学んだからです)」



学級委員の生徒たちを対象としたワークショップ風景から



© 2005 CARE/Josh Estey

現在、高校生のヴェヌーシ。卒業したら大学に進み、将来は銀行で働きたいという希望を持っている

インドネシア「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」報告 ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 鈴木 幸子

被災各国の中で最も震源地に近かったインドネシアのアチェ州では、死者・行方不明者十数万人に加え60万人もの避難民を生み出しました。CAREは、地震・津波発生2日後には被災地入りし、緊急支援活動を行ってきました。また、5年間の復興戦略を策定し、現在アチェ州のバンダ・アチェ、アチェ・ブサール、およびシムル島の3地域にて支援活動を行っています。

ケア・インターナショナル ジャパンが実施している「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」は、CARE全体のこのような取り組みの中、緊急段階から復興段階へ橋渡しをする復旧支援という位置づけとなっています。CAREが実施した調査から、被災地では水と衛生の問題が重点課題のひとつであることが判明しました。長期的に生活できる住宅が建設されるまでの間、清潔な水やトイレへのアクセスが限られ、人々は下痢などの病気を患う危険性があるのです。

このプロジェクトでは、バンダ・アチェおよびアチェ・ブサールの45箇所の避難所や仮設住宅にて生活する避難民約2万人を対象にプロジェクトを実施しています。主な活動は1) 避難民への清潔な水の供給、2) 仮設トイレの排泄物の除去、3) 水と衛生に関する知識の普及です。これまでの支援活動を通して、1) 1日平均17万リットルの水を供給、2) 1日平均800人分の排泄物を処理、3) 看板28台を設置し、水と衛生に関する知識・情報を普及、また水場やトイレの衛生管理を実施する住民組織を各コミュニティに結成しました。

津波以前のアチェ

アチェは原油や天然ガスといった天然資源が豊富で、そのほとんどは日本へ輸出されてきました。実は日本経済と密接な関係があるアチェですが、津波以前は、反政府勢力「自由アチェ運動 (GAM)」とインドネシア政府の間で30年近く紛争状態にありました。これまで延べ約1万5千人の犠牲者を出したと言われていました。紛争中はインドネシア国軍により外部との交流が遮断され、現地の状況はほとんど外の社会に伝わってきませんでした。

現在の状況

現在、津波の被害にあった地域では、被災前に住んでいた土地に戻る、あるいは他の土地へ再定住することは急務とされており、CAREの活動の中でも優先度を高めています。土地登記の問題に配慮し、新たな紛争を作り出さないためにも土地登記局と協働し、所有権の明確化を促しています。このようなプロセスには時間がかかるため、避難生活が長期化することが見込まれています。そこで、より安定した水資源を得るために井戸を設置して段階的にタンカーでの水供給を縮小していく予定です。CAREではインドネシアで水分野の専門性の高い現地NGOと協働して、活動を行っています。

現地スタッフの声～水と衛生プログラム チームリーダー アンシアさん～

CAREでは、ただ単に給水サービスを提供するだけでなく、対象地域の人々が自ら問題解決していくことができるよう促すことを重要視しています。コミュニティの人々に参加を促すには、まずCAREのスタッフとコミュニティの人々の信頼関係を築かなければなりません。

水と衛生プログラムのチームリーダー、アンシアさんは以下のように語ります。「インドネシア人スタッフでもコミュニティにとっては外部者。コミュニティとの信頼関係を築くため、避難所に寝泊りしたスタッフもいます」。当事業では水管理委員会を組織し、被災者が主体となって避難所の貯水タンク管理



CAREから供給された水を使って洗濯をする被災者の人々 © Harsha De Silva

などを行っています。この水管理委員会には男性のみでなく女性も加わり、双方の意見を踏まえて施設の設置場所の決定などをします。アンシアさんはさらに続けます。「対象コミュニティの人々が水やトイレの問題を自分たちの問題と考えることが大事です。水管理委員会を組織したのはそのためです。委員会メンバーは、施設のメンテナンス方法を積極的に学んでいます。CAREは彼らが責任を持って施設を管理できると信頼していますし、彼らもそのようなCAREの支援姿勢を尊重してくれます」。

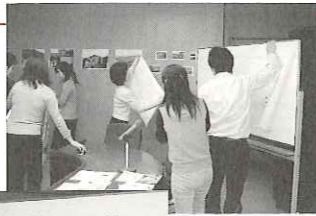
まとめ

長い紛争期間中、世界からほとんど注目されなかったこともあり、津波をきっかけに世界中から支援が寄せられたことをアチェの人々は概ね肯定的にとらえています。現地では、NGO、国連やODA機関など外国の組織・機関だけではなく、インドネシア国内からもNGOなど多くの組織・機関がアチェの復興支援活動を実施しています。外国の支援組織・機関が多額の資金をもって支援にあたるのに対して、現地のNGOなどの存在はどうしてもかすんでしまいがちです。「インドネシアの人々は何もしてくれなかった」といった誤った印象をアチェの人々が抱かないよう現地の人々の取り組みも尊重した支援が、紛争と地震・津波という二重の災害を経験したアチェの真の復興のためにも重要であるといえるのではないのでしょうか。

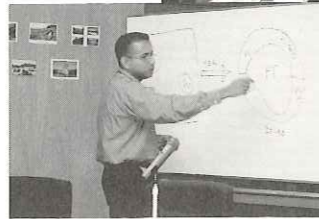
スリランカ人スタッフ 日本活動レポート

Sri Lanka

今回、来日したファイザル・アブドゥル・カーダー



2月16日の学生向けワークショップの様子



■参加された方のコメントから (抜粋)

「ひとつのプロジェクトを考える際、結果が見えて初めて成功と言える。しかし、その結果を何で測るのか。これまでの授業や講演会において外部者が現地へ入るまでにすべき準備、現地で効果的に住民たちと関わる方法を学び、さらに今回、「評価」という最後のステップまで考えることができたことで、以前にも増して自分の中で「プロジェクト・サイクル」がはっきりと見えるようになった」

実行しているのか、その手順と手法を説明しました。その上で、現場の事例をもとに、事業目標の達成度を測るための指標は何か適切かを参加者がグループに分かれて話し合い、発表しました。すべて英語で行ったワークショップでしたが、20名の参加者は全員、国際協力関係分野で学んでいる大学生・大学院生であり、非常にモチベーションが高く、熱心に取り組んでいました。参加者の皆さん、お疲れさまでした。

■株式会社 生活の木における一般向け報告会の実施

株式会社 生活の木には、2004年12月のスマトラ沖津波以来、当財団の活動について深くご理解いただき、資金面のみならず広報面などさまざまな形で当財団の活動をサポートいただけてきました。今回は、報告会の会場提供でご協力いただき、環境や国際社会への貢献に対する意識が高いストリート、東京・表参道にある株式会社 生活の木 原宿表参道店において2月23日と25日の2回にわたり、報告会を実施しました。

2月23日

23日は、5Fのコミュニティルームに

午後6時半から実施、立ち見の人も出るほどの大盛況でした。スリランカに深い思いをもつ人も多く、お仕事帰りに遠くから駆けつけてくださる方もいらっしゃいました。また、スリランカ大使館の方にもご出席いただきました。最初に、スリランカ政府観光局マーケティング広報部長の副島様から、スリランカという国の概要についてお話いただきました。その後、カーダーによる紅茶農園の生活



生活の木の報告会にて



生活の木の店舗前にて。写真右は、カーダーの通訳を務めたプロジェクトマネージャーの栗原(栗原執筆の記事が本誌3ページに掲載されています)

当財団の活動に対するご理解とサポートに心より感謝いたします。

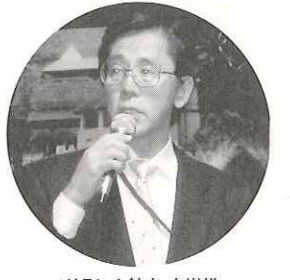
* (株)生活の木
東京都渋谷区神宮前6-3-8
http://www.treeoflife.co.jp



(株)生活の木* 販売促進部リーダー 野口様



スリランカ政府観光局副島様



スリランカ航空 大嶽様

についての説明およびCAREのTEAプロジェクトにおける取り組みについて報告がなされました。来場者からは、「(紅茶農園内の) ゴミや下水問題など住環境についてもっと知りたい」「性別による職業の違いは農園特有の事例なのか」などの質問が出され、日本人の生活からは想像もつかないような紅茶農園に住む人々の生活に対して興味を持って聞いていただけたようです。また、報告および質疑応答終了後に、私たちの活動をご理解いただき、今回の報告会をサポートいただきましたスリランカ航空営業部長の大嶽様からお言葉をいただきました。

2月25日

25日は、2Fのフロアにて報告会を実施しました。2Fは、1Fの店舗から石の

階段をちょっと上がったところにある、おしゃれなスペースで、ハーブティーを飲みながらハーブ関連の本を楽しむことができるハーブティーラウンジ&ライブラリー。事前に報告会への参加申し込みをさせていただいていた方以外に、当日、店舗にて買い物を楽しんでいた方にも多くご参加いただきました。今回の報告会

の来場者の中には、日本在住のスリランカ人ご夫妻の姿も見られました。「農園の幼稚園の実施体制は?」「農園の病院はどのような状況か」「農園内の託児所の料金は?」など、農園の生活に関する細かい質問が集中し、農園における生活について多くの方に興味を強くもっていただけました。

■アンケートまたメールなどによるフィードバックから (抜粋)

「スリランカは比較的、教育・生活レベルが高い国と認識していましたので、このような状況があることは驚きでした」
「プロジェクトを通して、紅茶農園の労働者と経営者間のコミュニケーションを円滑にし、情報提供の促進に寄与する貢献をしたことは大変な成果だと思います」
「こういう報告会があることで、興味・関心の範囲が広がり、とてもうれしいです。難しいかと思いますが、現地担当者から直接こうして話を聞く機会が増えるとうれしいです」
「知らないものが多く、また自分自身が知らないことを恥ずかしく感じた」
「現地の労働者との関係構築について、指導側の現地の方にとっても難しいこととおっしゃっているのを聞いて、協力関係を構築する難しさを感じました。自立支援について、その時期の見極めと、現地スタッフのリーダーシップを育てる方法に強い関心を持ちました」

カーダーからのメッセージ

日本滞在中、私は日本の大学生を対象として報告会を2回、ワークショップを1回、さらに、一般の市民向けに報告会を2回行いました。また、都内ではJICAやUBICなどいくつかのミーティングにも参加しましたし、京都府和束町のお茶農園の視察へも行きました。これらはケア・インターナショナル ジャパンのスタッフのサポートなしではこなせなかったと、スタッフの皆さんに感謝しております。

仕事以外では、東京のお台場のような近代的で活気のある場所や、京都や奈良のような伝統と歴史の感じられる芸術的な場所にも足を運び、近代的な部分と伝統的な部分の両方を見ることができて、とてもバランスのとれた、興味深い経験をしたと思います。日本料理も日本滞在中には大いに楽しみました。特に、お寿司とおにぎりがとても気に入りました。

私は、大学生たちに対してDMEについてのワークショップを実施しましたが、そのとき、学生たちが全般的にとっても静かであるという印象を受けました。最初は、モニタリング・評価に関心がないのでは、とも思いましたが、グループで行った作業やプレゼンテーションを終えたとき、その成果を見て、彼らは皆とてもよく私の話を聞いてくれたことがわかりました。

私の日本に対する第一印象は、とても静かな国で、みんな公共の場所も非常に静かである、というものです。日本にいる間、私は自分の国と比較して日本の変化や改善されている部分を目にするたび、これらの変化や改善とそれに対する金銭的投資との関係について考えました。しかし、私たちはお金をかけなくても、たいいていのことを変えたり、改善していくことができるということがわかりました。ある国が発展していくためにもっと大切なことは、そこに住む人々の姿勢なのだと思います。



Cader.



京都にて

日本の日曜日を子どもたちとともに。湘南海岸にて



ゆりかもめに乗ってお台場へ。お台場は、カーダーの特に気に入りの場所となりました



「生活の木」の近くに来た最新スポット、表参道ヒルズにも早速、足を運びました



帰国日の前日の打ち上げにて



当財団スタッフ一同よりプレゼント。「お疲れさまでした!」

私の人生の大切な出会い ～「ボランティア」という選択～

ケア・インターナショナル ジャパン
デザインボランティア 佐藤 よし子



毎日会社勤めと家事に追われる普通の私にも参加できるボランティアはないかと探していたところ、ケア・インターナショナル ジャパンのホームページでデザインボランティアを知り、ここから私とCAREとの関わりが始まった。

デザイナーとしては十数年のキャリアを積んだが、ボランティアとは全く無縁の生活。その上、私の仕事は公共施設などの案内板や看板を中心とするサインデザインという特殊な分野なので、果たしてケア・インターナショナルジャパンの望む「デザインボランティア」として役に立てるのか多少疑問に思いながらの応募だった。ただ子どもたちが成長して気持ちに余裕ができたこともあり、少しは人のためにこの余裕を使ってもいいのではないかという思いがあった。

幸いにも展示会イベントのような、経験のある分野の仕事があり、昨年は微力ながらも日比谷公園にて開催された「グローバルフェスタJAPAN」におけるブース用展示パネル、また、ケア・インターナショナル ジャパンがカンボジアにおいて実施しているレインボー事業のポスターデザインなどでお手伝いをさせていただいた。素材となる写真や文言をメールしていただき、それらをひとつの画面に組み立てていく。書体や色のバランスを考え、完成時のサイズや展示される場所の状況などできる限り考慮して制作作業を進める。素材の中には心打たれる写真や幼い子供が描いた絵などもあり、すっかり感情移入してしまうこともあるし、地図の国境ラインをなぞりながら思いはその国へ飛んでしまうこともある。

またボランティアと言えども引き受ける以上はお金をもらう仕事と一緒に、締切りもあり、担当者の意向もある。CAREのスタッフにとってはきっと知って当たり前の地図中の国名と国の位置が合致せず宿題のように地図帳からせせと探し出したり、しかも英語の資料だったりすると、忘れたはずの向学心が刺激され時間を忘れてしまうこともしばしばなので、

制作作業は深夜に及ぶこともある。しかし毎日丁寧に原稿をチェックされる確かな指示をくださったスタッフとのやりとりの中で、金銭の授受のある仕事よりはるかに、責任と充実した時間を感じたことは全く予想外だった。

そればかりでなく、さまざまな事業の資料にふれているうちに、日々の生活の中で当たり前だと思っていたこと、例えば専門教育を受けられたこと、仕事を心得て家族を食わせてゆけること、病気になるらいつでも医療が受けられることや何より自分の生き方を自分で選択できることなどがいかに恵まれたことであるか、生まれて初めて自分自身の感覚としてとらえることができた。それは地を這っていた視線が鳥の視界になったような新鮮な驚きで、こんな

歳になり日常に追われていると、なかなかそんな劇的な体験をする機会はないので本当に驚いた。

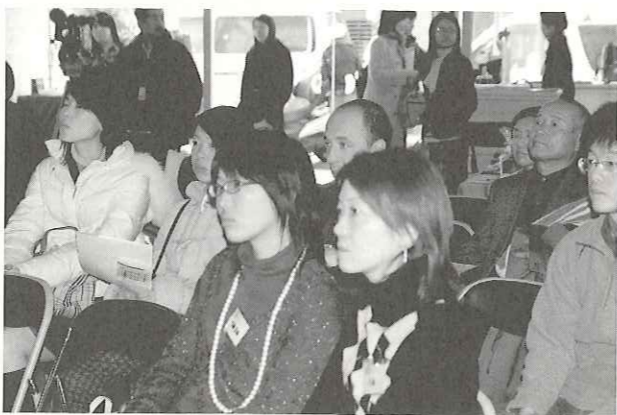
狭い世界のなかで生活している私には今まで何もできなかったし、国際協力という言葉も私にとっては非日常でそんな発想もなかった。これからもできることは多くないかもしれない。しかし気づけなかったことに気づいたこと、考えるきっかけを見つけたことで、もしかしたら私は国際協力ボランティアのスタートラインに立てたのではないかと不遜ながらも思っている。

年の瀬、娘を伴って銀座の画廊で行われた津波一周年イベントの写真展にお手伝いに出かけた。口で言ってもどうせ分からない今の子どもだが、見るだけ、聞くだけでもきっと小さな種を持ち帰ることができるのではないかと期待した。

なんとなく始まったボランティアのある生活は、期せずして根を張りつつあり、少し人生観が変わったような気がする。



静岡県にお住まいの佐藤さん（写真、右）。昨年10月、東京で開催されたグローバルフェスタJAPANに高校生と足を運び、CAREのブースを訪れてくれました



昨年末のスマトラ沖津波1周年企画「チャリティ写真展」(本誌4ページを参照)にも娘さんとお手伝いに来ていただき、報告も聞いていただきました

会員、寄付金協力者紹介

(2005年11月1日～2006年2月28日)
(敬称略・50音順)

みなさまの温かいご支援に事務局スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。

●個人賛助会員 (新規)

井藤 千嗣
小川 良雄
高柳 貴子
宮崎 総一郎

●個人準賛助会員 (新規)

会田 ひとみ
榎本 慈弘
並木 孝
ERIC KORPIEL

●パッケージ会員 (継続)

天羽 節子
飯田 多美
石黒 秀彦
市川 直子
泉 聡司
伊東 直
香取 昭
刈谷 敏久
河本 泰行
庚 珍化
菊地 恵美子
近藤 春恵
酒井 恵美
酒井 健
桜井 純子
瀬尾 佳伸
竹内 智之
成瀬 富美子
鳩山 由紀夫
松崎 史夫
三浦 みどり
水谷 素彦
安則 和子

●法人会員(継続)

(有)秋山商事
セイコーインスツル(株)

東京電力(株)
日産自動車(株)
(財)日本国際協力
センター
ミマスクリーンケア(株)

●個人賛助会員 (継続)

相川 富美子
青山 絢子
安部 洋子
荒井 慶子
安斉 徹男
石森 菊江
稲川 素子
猪野 愈
今堀 和友
植田 兼司
植田 東子
内ヶ島 敏博
内田 成輝
小沢 憲
影山 光太郎
笠原 忠夫
北村 知子
栗山 昌子
黒井 満
小泉 潔
合原 正二
高鹿 栄助
近藤 綾子
山東 昭子
篠崎 襄
高島 倫子
武田 光子
中島 千代子
成川 豊樹
仁科 雅夫
西村 すが子
羽坂 哲子
浜田 美芽
林 厚
原 禮之助

平林 義彰
堀岡 洋子
本間 ノブ子
松下 一弘
三浦 みどり
三好 達
椋木 千代子
森 義友・眞知子
師田 志津恵
横田 淳
和田 洋

●個人準賛助会員 (継続)

有野 博寛
有馬 光子
生稲 精子
岩本 依子
植木 昭
兒玉 格言
安淵 聖司

●寄付金協力者

岡野 えつこ
川島 久美子
佐々木 ミドリ
住田 敏彦
野口 三保子
野田 佐智子
脇田 里美

(特活)環境アリー
ナ研究機構
計画課有志一同
鶴沼高等学校
高津中学校
(株)ダビンチ
学校法人 東洋英和
女子学園
社団法人日本記者
クラブ
Think the Earth
プロジェクト

●冬募金協力者

藍野 仁志
青木 幹多
青柳 萬亀子
青山 絢子
青山 歌子
秋山 剛康
朝沢 まり子
足立 ひろ子
瀧美 伊都子
安部 洋子
新井 美代子
荒井 慶子
荒記 泰雄
有田 尚樹
有野 博寛
家宇治 賢
石井 栄子
石川 真穂
石博 純子
石戸谷 由子
石原 一子
石原 利枝子
石渡 咲子
泉山 高
市川 貞
伊藤 英夫
稲垣 滋
稲本 俊
稲森 禮子
犬飼 星斗
井上 武志
今井 隆吉
今村 達男
岩村 浩司
岩本 妙子
上田 美江子
上野 俊子
上原 綾子
植村 久志
魚本 秀
内田 成輝
内田 英子

内田 三美
海野 光雄
海老原 孝治
遠藤 純子
遠藤 都志恵
大江 佐知子
大岡 純雄
大河原 良雄
大越 隆文
大竹 静香
大塚 福恵
大西 道生
大西 慶子
大西 守
大野 洋子
大萩 順蔵
大橋 津満子
大羽 きよ
岡崎 二三
尾形 孝
岡田 知愛子
岡田 良雄
岡庭 明彦・万里子
岡村 秀美
小川 糸み
小川 奎子
小川 朝子
沖田 晋吾
小倉 恒雄
小澤 太郎
柿澤 未途
柿沼 實
桂 弘
桂 秀子
金田 平夫
金田 招重
川上 道一
川城 正信
木内 やい
菊池 正男
菊地 恵美子
岸本 桂子
菅原 由紀子

北岡 さよ子
城戸 高光
貫布根 桂子
木村 寿美
草川 益美
工藤 彰子
栗原 保子
黒河内 久美
ケネス クボ
小井土 喜代子
高鹿 栄助
黄金井 達夫
小倉 婦美子
小平 靖
小林 憑四郎
小堀 宗武
小宮 初雄
米谷 信子
小谷中 剛
是枝 隆定
木幡 清子
小渡 隆夫
斎藤 惇生
斎藤 俊子
斎藤 由美
斎藤 喜子
佐伯 佳代
阪上 正昭
神原 真美子
神原 五子
桜井 純子
笹川 幸子
佐々木 友子・貴士
佐々木 美晴
佐藤 貞三
佐藤 賢司
佐藤 健治
佐藤 妙子
佐渡 弘・ユリ子
三瓶 正子
椎野 君子
鹿野 好子
柴田 享美・裕子
柴田 みち子
渋谷 厚美
川島 敏彦
島 実津江
島田 富英

庄司 慈明
白石 露
進谷 健
進来 富子
菅沼 みゆき
菅原 規仁
菅谷 弘
杉本 庄吉
鈴木 由美子
鈴木 久恵
鈴木 生子
鈴木 政史
鈴木 靖郎
角 章子
角 充弘
住田 織枝
諏訪 孝
関口 真理恵
瀬口 博子
曾我 ふき子
平和代
高木 富美子
高嶋 正明
高瀬 智恵
高瀬 覚照
高橋 良郎
高橋 裕子
高島 美人
高松 妙子
高山 友二
武川 節
竹腰 郁代
武村 悦子
竹村 信夫
多田 喜久子
辰野 明
谷口 七郎
塚原 国男
辻 節子
土田 ヨウ子
角田 法子
鶴園 禮子
寺岡 紀美子
戸川 幹夫
戸田 よし子
永井 康夫
中島 千代子
長嶋 久子
永末 美代

中野 紀美代
永野 京子
中平 立
長船 昌吾
中本 さゆき
奈良 耕作
難波 嗣朗
新実 功
西谷 宏之
西山 敬三
西山 キミエ
西山 瞳
菲澤 嘉雄
野口 晏男
野口 千歳
野崎 美知子
野田 幸裕
乗富 俊二
野中 敏子
野中 稜市
野村 健太郎
橋本 靖男
長谷川 陽子
鳩山 安子
羽田 英彦
林 桂子
林 正敏
原 勝太郎
東 末子
平林 薫
廣島 総司
廣田 美代子
広段 隆
藤 ちえ
藤本 たみ子
布施 博子
北條 真弓
堀井 武男
堀岡 洋子
堀田 シナ
本田 早苗
牧野 正久
町井 絹子
松井 おさむ
松浦 芳枝
松浦 葉子
松川 祐子
松田 茂之
松葉 芳子

御木本 澄子
三島 弘子
水島 雅子
道添 花恵
満島 裕子
満島 フミ
宮川 慎二
宮川 武夫
村上 悦雄
村松 寅三郎
村山 良一
森 時子
森下 泰夫
森脇 道子
諸井 政昭
諸岡 孝昭
師田 志津恵
矢沢 歌子
安田 光男・春菜
柳田 順達
柳谷 誠子
山内 朱実・実華
山口 義雄
山崎 勝之
山田 清一
山田 みつゑ
山田 昭広
山中 康平
幸 暁美
横田 笑
横田 謙
横山 勇
横山 克美
吉川 晋平
吉田 美佐江
吉原 幸一郎
吉村 精仁
米田 清
領毛 幸子
脇山 洋子
和田 寛
渡辺 糸み子
渡部 怜子
渡辺 京子
渡辺 省三
渡辺 康隆
渡部 加代子
渡会 武嗣
MURATA ANGELINA

遠藤行政書士事務所
杉の子幼稚園PTA
ダイヤ精密(株)
富田税理事務所
(財)日本ボールルームダンス連盟
(株)丸和
ミマスクリーンケア(株)

●スマトラ沖地震による津波復興募金協力者

石川 峯子
井上 仁
大竹 憲子
影島 保子
カタオカ マユミ
上村 めぐみ
城戸 高光
小貫 茜
近藤 恵子
近藤 美智子
佐々木 真二
佐藤 サダ子
佐藤 美幸
篠田 恵
嶋津 義久
清水 緋奈子
白石 光一
高木 大輔
中西 淳子
中村 治男
西村 修
西村 隆一
野口 千鶴
野口 千歳
前田 英樹
南川 純子
村松 良樹
山崎 博子
山下 修三
山元 良男
横田 謙
吉田 和夫
吉田 喜己
吉野 千穂
脇坂 佐記子

NPO法人ウォーターセーフティーマネージメント協会
大阪府立大和川高等学校
(特活)環境アーリーナ研究機構
ケア フレンズ札幌(株)生活の木
聖心大学同窓会宮代会
(特活)パブリックリソースセンター
文教大学グローバルサークル&ボランティア
PEOPLE PURPIL

●パキスタン地震緊急募金協力者

青木 平三
青木 慶子
青嶋 光枝
青戸 精二
青野 和子
秋田 清実
秋山 安子
秋山 由利子
朝倉 徳道
朝倉 克巳
芦原 俊介
足立 ひろ子
阿部 隆
天石 和子
荒井 慶子
荒記 泰雄
新崎 まり子
荒堀 弘子
有田 尚樹
安藤 ヒロ子
伊沢 敬次
石堂 紳一
石本 満里子
石森 菊江
猪瀬 道子
板津 智子
一條 和生
猪股 すみい
猪股 英子
今堀 和友

井村 広次
岩井 清満
岩田 周子
岩田 隆介
岩本 依子
植村 淳子
臼田 典子
馬渡 弘人
梅下 茂乃
梅田 しか子
浦川 美智子
江口 光子
柄澤 貴也
遠藤 加代
大岩佐 知子
大越 隆文
大澤 貴美子
大須賀 敬子
大曾根 義子
太田 孝雄
大西 庸介
岡崎 由侑子
岡田 安弘
緒方 四十郎
沖 高司
奥田 美佐枝
奥村 真一
小崎 政純
小沢 晃子
尾関 幸子
カタオカ イツペイ
加藤 さち子
加藤 尊明
兼高 幸子
鎌田 昭子
上村 めぐみ
神谷 齋
亀田 久忠
鴨志田 一穂
鴨田 郁子
川口 真由美
川崎 良子
河鱈 洋子
神田 圭子
木内 智弘
北川 暁子
北原 政澄
城戸 毅
城戸 高光

木下 佳子
木村 薫
木村 寿美
朽木 亮
工藤 昌子
久野 健
久保田 浩司
熊沢 正幸
栗原 喜七
栗原 未来
黒田 則子
桑江 昌裕
古池 悦子
小池 公代
小池 照子
高坂 知節
河野 満理子
小浦 芳信
黄金井 達夫
国府方 嬌子
小塚 実千代
小沼 順子
小林 えりか
小林 清
小林 隆子
小林 正子
小原 健二
小宮山 信幸
近藤 藤作
近藤 正昭
斉藤 和子
斉藤 かよ子
斉藤 孝一
齊藤 寿子
斉藤 ヒサ子
斉藤 由美
斉藤 喜子
酒井 琴子
酒井 英和
阪上 昂
佐久間 正夫
桜間 弘三
佐々木 研二
佐藤 雄司
佐藤 サダ子
佐藤 政行
佐藤 光広
澤口 美穂子
下畑 清臣

志知 和人
篠原 真美
川島 敏彦
島 実津江
嶋田 真理子
嶋津 義久
清水 知江
首藤 恵美子
代田 良恵
白谷 清二
白髭 真理子
新城 泉紀
新妻 喜政
菅家 道人
菅原 すて子
杉田 文枝
杉田 裕子
鈴木 由美子
鈴木 昭・みつほ
鈴木 秀子
脊川 洋子
瀬戸 禎子
タイス ヘルガ
高木 大輔
高木 とし
高橋 ハマ子
高橋 秀雄
高橋 力夫
田口 瞳
田口 汎子
竹崎 華都実
竹下 茂生
武田 恭子
竹原 直子
武村 悦子
田島 修治朗
多田 美幸
建田 幸壮・智子
谷崎 孝子
辻本 巖
土本 志保子
角田 さち子
角田 法子
寺内 和弘
東條 毅
徳沢 道子
徳田 智子
豊田 仁美

内藤 伸広
長尾 とみ子
長岡 功
中奥弥寺 隆
中川 健
中島 智恵子
長嶋 正美
中島 ヨシ子
中谷 幸
中西 淳子
中野 克郎
長野 雅子
中村 歌
中村 夫佐乃
中村 政憲
中谷 みき・みはる
奈須 達郎
鍋田 忠男
榑崎 正博
成瀬 義明
成野 ふみ子
西谷 光恵
西野 松子
西村 昇
新田 克典
布川 保雄
延原 敬子
野辺地 きみ子
萩原 史恵
花川 直子
羽根田 輝雄
浜辺 マサエ
原口 美知恵
東 晶子
日比 みつ江
平野 雅子
廣田 美代子
深作 すみれ
藤谷 武男
古 恭子
古田 昌子
細井 幾代
堀井 武男
堀川 憲子
堀田 シナ
本田 至
本田 早苗
本廣 良江

前勝 和代
前田 千代子
牧野 なぎさ
増田 源一
松井 おさむ
松浦 いづみ
松下 力
丸山 勝美
三浦 浩成
水野 清邦
水本 眞吾
緑川 正二
美野 勝
宮地 ヨリ子
宮本 統
村木 敬
村自然
村西 幹生
村松 寅三郎
命長 廣司
森岡 昌子
森川 太美
森野 智栄子
安田 和男
山岸 克至
山崎 秀男
山下 修三
山田 徹・智美
山田 恭子
山野 栄次郎
山元 良男
湯川 夏樹
横田 晶子
吉田 皓治
吉田 隆男
吉田 誠
吉村 真実
吉村 るり子
米島 定宏
米山 朗弘
ロキン
鷺谷 和彦・扶字子
綿岡 輝雄
渡辺 忠行
Simonsen Andreas
海原の会
大阪府立大和川高等学校

大野滋童園
鹿嶋市立豊郷小学校1年
(特活)環境アーリーナ研究機構
ケア・フレンズ 東京
神戸大学国際協力研究科バド地震支援委員会
堺プレイザーズ
相模大野駅前郵便局
志摩市社会福祉協議会
松陵西小学校3年2組
スナック 喜代
仙台白百合学園高校 奉仕委員会
仙台市立四郎丸小学校あすなろ児童会
大濠観光会館
ダイヤ精密(株)
鶴田メンタルクリニック
10ンティア・キング
天理教秋田教区女子青年部
東京測量調査設計事務所協同組合
都和小同窓会
七重浜郵便局
(有)パシフィック実業
東町和楽会
福井市くるみ児童館
福岡県支部協議会
文教大学グローバルサークル&ボランティア
まちゃんストア
松崎中学校 5組
瑞浪郵便局
(有)宮崎パシフィック
DEION Kick Boxing GYM
IKKI
NTT労組退職者の会

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.2
2006年3月31日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel : 03-5950-1335
Fax : 03-5950-1375
E-mail : info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE Notice Board

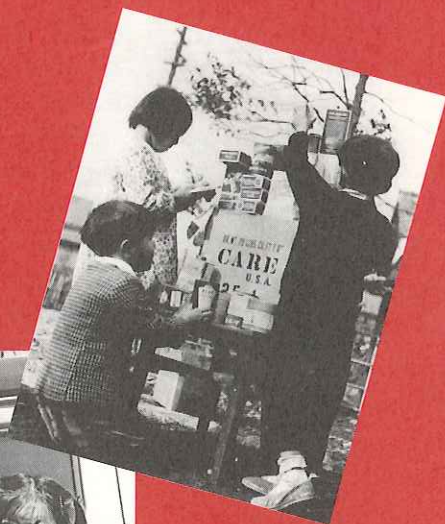
60年前、CAREパッケージを受け取った方を探しています。

1946年5月11日の夕方、戦争で損傷を受けたフランス、ル・アーブルの港にCAREパッケージ第一便が届けられました。フランスの被災した人々に対するアメリカの友人や親戚からの贈り物。ヨーロッパの被災者たちを救うために、アメリカの市民団体が集まって設立されたCAREの活動の始まりでした。その後、CAREの支援は、ヨーロッパのみならず、南米、アフリカ、アジアへと世界各地へ。戦後の日本では、横浜に事務所が開設され、8年間にわたって約1,000万人の日本人がCAREの支援を受けたと言われていています。

今年、2006年5月11日は、CAREパッケージ第一便が届けられた日から60年。戦後の日本の復興と人々の生きていく力を支えたCAREの歴史、そして現在、大きく成長したCAREの国際的な支援活

動をふりかえるため、当財団では、今年の5月以降、さまざまな企画を検討しています。

ケア・インターナショナル ジャパン事務所では、当時、CAREパッケージを受け取られた方やCAREに関連する思い出をお持ちの方を探しています。当時のCAREの活動について直接的、間接的にご存知で、情報提供にご協力いただける方は、当財団事務局までぜひご一報ください。



*皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、ご感想などは、CARE World誌面上にてご紹介させていただきます。また、「ケアの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に“CARE World”を広げていきたいと思ひます。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！